

数か月前、横浜駅西口地下街の書店で、夏目漱石が書いた「文学論」という文庫本を買った。あまり深く考えずに軽い気持ちで買ったのだが、読み始めたところ、思ってもみなかったことが書いてあるのに驚いた。

そこには、文学だけでなく、演劇や哲学や心理学等の学術の分野に至るまでの英語の様々な表現例が列挙されており、それぞれに日本文の対訳を付けて評論がなされていたが、その記述が、当然ながら、すべて明治時代の文体で書いてあったからである。

ちなみに、この本のことを掻いつまんで紹介すると、本文の最初の部分である「第一編 文学的内容の分類」「第一章 文学的内容の形式」は、冒頭が、

「凡そ(あよそ)文学的内容の形式は(F+f)なることを要す。Fは焦点的印象または観念を意味し、fはこれに付着する情緒を意味す。されば上述の公式は印象または観念の二方面即ち認識的要素(F)と情緒的要素(f)との結合を示したるものといひ得べし。」

という具合で始まり、

第二章 文学的内容の基本成分

第三章 文学的内容の分類及びその価値的等級

第二編 文学的内容の数量的変化

(章については、省略する。以下の編も同じ。)

第三編 文学的内容の特質

第四編 文学的内容の相互関係

第五編 集合的F

という全体構成となっていた。

私は、最初のところを読み始めたが、明治の文体の記述である上に英文が出てくるので、分からない英単語について辞書を引きながら、自分なりに訳しながら読んで行ったので、すぐつかえてしまい、なかなか先に読み進めなかった。それで、読んだ後の部分を、パラパラとめくる程度で、この本を読むのを投げ出してしまった。

そんな状態であったところ、このコロナ禍で、家にいることが多くなったため、私にとっては相当難解な、この文学論に再挑戦してみたのである。

夏目漱石は、明治33年、33歳の時(彼は、明治元年の前の年に生まれた。)第五

高等学校(熊本大学の前身)教授の職にあったとき、文部省により英語教育法研究という名目で英国留学を命じられた。彼は、同年11月にロンドン北方に位置する学問の府として知られるケンブリッジに到着したところ、政府より受けた学費が当時の金で1,800円と少なく、その時に当地に滞在していた日本人は2,3人いたが、金持ちの子弟ばかりで、とても彼らと同じような生活や語学の勉強ができないと判断して、結局ロンドンに行くこととした。

ロンドンでは、まずロンドン大学の聴講をしたが、あまり役立たないと判断して3,4か月でやめ、代わりに、シェークスピアの研究者に個人教授を依頼し、この私宅教師の所には、1年ほど通ったという。この間、留学前から患っていた神経衰弱症の苦しみの中で、英文学に関する書籍を次々に読破したという。今まで、ほしいままに読書に耽る機会がなかったので、目を通さなかったもの、十中六、七を占めているのを常々遺憾と患っていたので、この機を利用して一冊でも多く読み見終わろうとした、有名な典籍も大方は読んだと文中で述懐している。

この本の中で、特に私が興味を持ち、かつ、なるほどと思った、第二編中の「第四章 悲劇に対する場合」を紹介する。なお、読みやすくするため、箇条書きとした。

- 1 悲劇文学は、古来常に文学の中で有力な位置を占めており、特に日本では、劇といえば、必ず悲劇を意味するといっても過言ではない。
- 2 悲劇とは、いわゆる断末魔の悲酸を中心として成立するものなので、なぜ我々がこのような苦痛の表出により快感を得ることができるのかは、悲劇の根本問題の1つである。
- 3 人は活動の動物であり、活動は、ある意味で我々の生命の目的である。そのため、我々が活動禁止の状態が極度に達すれば、生きていても、その実を失う。囚人の最も恐れるのは、苦役や看守ではなく、暗室禁錮にある。
- 4 苦痛は我々の最も忌む所であるがゆえに、最も存在の自覚を強めるというパラドックスから来るのに似ている。
- 5 演劇は人生の再現であって、しかも人生よりも強い再現であり、悲劇にあっては、それが最も顕著である。
- 6 悲劇上の死生の大問題は、我々の実在を最も強烈にその脳裏に映し出すが、これは仮の苦痛であって、本当の苦痛ではない。ただ役者の仮装した苦痛なので、観ている方には安心である。
- 7 人は、冒険性の動物である。シェークスピアも言っているように、野ウサギを驚かすよりライオンを呼び起こす方が血が騒ぐ。人は、危険そのものを好むのではなく、この危険に打ち勝った時、この困難を凌ぐことができたとき、自己の力を自覚して、これによって生じる快感を大きくすることを冀っている。
- 8 苦痛の最も甚しいのは、生死の境目に逢着したときである。

- 9 苦痛を好み困難を愛する人がいるが、病的な人でなければ、これは苦痛の道楽者ともいうべき人である。これらの人が求める苦痛は、決して深刻なものではなく、一定の度を超えれば、たちまち、これを避けようとするからである。
- 10 これらの道楽者の大部分が、社会の中層以上に属する。悲劇を好む人の中には、
この道楽者も多くを占めている。
- 11 ショーペンハウアーの厭世主義も、その実、真実で真面目なものではなく、まったくの贅沢厭世観だと評する人がいる。
- 12 大方の詩人、小説家、美術家もまた、不誠実である。本当に感動したときは、「あー」とか「おー」とかの付いた短い感情語が出るだけで、詩の体を具えていないものである。詩や小説としての価値は、このような感情語に一種の技巧を加えて、これを推敲した後、初めて生まれるからである。その実体験の感動は、表現したものより微弱であることが多い。これらの人達もまた贅沢家である。

以上は私がそう受け取ったもので、必ずしも漱石が言わんとしていることと合致していない点もあるかもしれないが、人々が演劇を好み、とりわけ悲劇を好む理由を的確に言い表していると思う。

漱石は、1867年(慶応3年)に江戸、牛込(今の新宿区)で生まれた。生家は牛込周辺の名主を務めるような家で裕福であったが、母が高齢になってから生んだ末子であったため、里子に出されたり、養父の離婚により実家に戻ったりした。幼少のころ天然痘にかかり、その痘痕があったという。また、実父と養父との仲が悪かったため、夏目姓に戻るのは21歳になってからで、かなり波乱にとんだ幼少・青年期を過ごしたようである。

彼は、東京帝国大学入学後、厭世観にとらわれ、神経衰弱を患うようになり、それを生涯引きずることになる。英国留学中も文部省への報告書は白紙で出したり、下宿の女主人を心配させたりして、2年目には相当悪化したため、帰国することになった。

漱石自身も留学時を「もっとも不愉快な2年なり」と言い、日本帰国後の2年半もまた不愉快な時期であったとしている。当時の国勢隆々たる英国は、アジアの東のはての、近代化が緒についたばかりの島国からやってきた留学生にとって居心地がいいわけではなく、神経衰弱が悪化するの分かるが、これが帰国後も続く。日本に帰ってから東大の講師になるが、前任が小泉八雲だったため、八雲の詩的空氣に包みこんでしまうような講義と違って、漱石の講義は分析的で固い講義だったため、学生の間で不平不満が噴き出し、八雲留任運動までもが起った。なお、この講義は、「文学論」の記述そのものではなかったかと私は思う。また、教え子の藤村操が、受講態度が悪かったので叱責したところ、数日後、華厳の滝で入水自殺して、これを漱石のせいではない

かとされたりした。病状の悪化は、これらが大きな要因となっていたのではないかと言われている。

漱石は、神経衰弱が悪化する中で、気晴らしに小説を書いたらどうかと俳人の高浜虚子に勧められ、「吾輩は猫である」や「坊っちゃん」を執筆して発表し、これが好評を得た。作家としての名声が高まるとともに、やがて多くの人々が漱石邸を訪れるようになり、木曜日に定例的に会を開いたため、この集まりは文芸サロンのような様相を呈すようになった。やがて、この木曜会と呼ばれた会のメンバーは、漱石門下生と呼ばれるようになるが、ここでは漱石とメンバーは対等の議論を戦わせ、師弟というような関係とは言えない状態だったと言われている。この門下生の多くは、その後の日本の各界の第一線で活躍することになる。帰国4年後、漱石は、一切の教職を辞し、職業小説家となることを決意して、朝日新聞に入社する。その後「三四郎」、「門」、「それから」などを次々と発表していった。なお、「文学論」について、漱石は、「余の熱心なる労力によって組織せられたるものなり、但し、十年の計画を二年につづめたるため、未完品なるを免れず」として、今の自分は多忙であるなど、諸般の事情により、この未定稿をあえて版行したとしている。

彼の生涯は、顔にある幼少期からの痘痕、青年期からの神経衰弱、肺結核、その後も胃病、糖尿病と多くの病気に付きまわれ、精神的にも、肉体的にも多くの困難を抱えていた。そういう中で、大学に入る前も、各教科はほとんど首席で、英語の成績はずば抜けていたそうである。英国留学中も、書籍を買い漁って、外へ行くよりは、家の中で、本を読んでいる方が多かったのではないかと思えるような猛勉強をしたようである。才能はもちろんだが、この意地と頑張りには、敬服するばかりである。

彼は、小説家になってからは、晩年になって患った胃癌が原因で亡くなるまで小説等を書き続けながら、前述の木曜会を中心とした文化的活動により、当時の日本のエリート層のレベルの底上げにも力を尽くし、後続する日本の文芸に大きな影響を与えた。

漱石は、明治元年の前年に生まれ、大正4年に50年の生涯を閉じた。

私には、彼は、正に明治維新という時代が生み、育てた人に思えてならない。そして、彼自身それをよく自覚し、生涯付きまとう病気と闘いながら、その時代が自分に与えた使命に全力で応えたのである。

(出典:「文学論・(株)岩波書店発行」、「フリー百科事典ウィキペディア」)